

とくいく「禅語」十九

■ 同事（どうじ）

曹洞宗の信仰生活の中に「同事」という言葉があります。道元禅師は「同事」を修証義の中でこう示されています。「同事というは不違なり」【同事とは違わないことである。】常に相手の立場に立って、同じ気持ちで共に喜び、共に悲しみ、寄り添って生きていく事を表しています。「同事」とはそういった意味の禅語です。

「同事」を実践したこんな話があります。東京ディズニーランドで実際にあった話です。

ある日、若い夫婦がディズニーランド内にあるレストランにやって来て、自分たちの食事に加えて「お子様ランチ」を注文したのです。東京ディズニーランドのマニュアルでは「お子様ランチ」は九才以下の子どもにしか出さないことになっているのです。困ってしまったウェイトレスが訳を尋ねると、この若い夫婦はちょっと沈黙したあと「実はここに来ることを楽しみにしていた娘が、昨年事故で亡くなってしまったのです。今日はその娘の命日なので一緒にここで遊んで、一緒にここで食事をさせたくて・・・」これを聞いたウェイトレスはこみ上げてくる涙をこらえて、上司に相談に行きました。しばらくするとそのウェイトレスとチーフは精一杯の笑顔で「承知致しました。今一度レストランの入り口から入り直していただけますか？」と促しました。

若い夫婦は怪訝な思いで入り口まで戻り、入ろうとすると、そのレストランのスタッフ全員がきれいに並んで出迎えてくれました。「おとうさんとおかあさん、そしてかわいいお嬢ちゃん、ようこそいらっしゃいました」と言って、四人掛けの席に子供用の席まで用意して「三名様こちらへどうぞ」と案内したそうです。若い夫婦は本当にうれしそうに涙を浮かべ「お子様ランチ」を囲みながら食事をしたということです。

如何だったでしょうか？これはディズニーランドのマニュアルにはないものですが、これこそ「お客様へ感動を」の精神を見事に実践したものです。相手と同じ立場になって思いやり行動すること、お互いがお互いを活かし合うことが「同事」なのです。

道場稽古においても「同事」を実践する場面が数多くあります。当道場での組手稽古は、打撃強度とスピードを抑え、正しい形を意識して行う「動作合わせ」から、打撃強度、スピードを抑えて感覚的に技を出し合う「軽打法」で行います。自分本位に相手を痛めつけるような攻撃は厳に戒めています。自分だけが上達すればよいといった考え方では本当の意味での上達はあり得ませんし、相手との信頼関係も生まれません。お互いの立場に立ち、お互いを高め合うような感覚で稽古をすることが大切なのです。

日常生活でも、こんな経験をしたことがありませんか？例えば、家で弟や妹に勉強を教える時に「何で分からないんだ」「何モタモタしているんだ」とついイライラしたり、職場で仕事が自分の思ったように出来ない同僚や部下にイラッときたり……。しかし、

そんな時は冷静になって自分が未熟だった頃を思い出して、相手の立場に立ってみれば、「そういえば、自分も出来なかったよなあ」などといった違う感情が芽生えてくるはずです。

同じ気持ちの人や自分の気持ちが分かってくれる人がいることは、とても心強く安心できるものであります。「同事」を実践していくことで私たちの生活は、より豊かで実りのあるものになることでしょう。